

世界一の暗殺者ニニヤ

木綿絹ごし

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

覚醒したニニヤが絶望から救われる……のか!?

※ただしツアレは登場しない。

# 目次

世界一の暗殺者ニニヤ

1



## 世界一の暗殺者ニニヤ

「はい、お帰りなさいい」

「だ、誰だ!？」

玄関を開ける際、鍵は掛かっていた。そして室内の灯りは消えていた……ならば祖母は出掛けているはず。

正面扉から突如現れた人物。肩口の上で短めに切り揃えられた金髪の彼女は、口元を狐のように吊り上げながら話しかけてきた。

同行していた「漆黒の剣」リーダー「ペテル・モーク」が咄嗟とつぎに反応し、今回の依頼主であるンフィーレアを護衛すべく前に出た。

「もうー、何日も帰って来ないからお姉さん心配してたんだぞ」

ペテルからの言葉を無視した彼女は、腰から引き抜いたステイレットを舐め回し、狐のように横目で見つめていた。

「あ、あの……貴女は……貴女は一体何者なんですか!？」

見知らぬ彼女に対してンフィーレアは質問を投げかけた。もしかしたら祖母の知り合いかもしれない。武器を手にした彼女は百歩譲っても味方とは思えないが、少しでも

心を落ち着かせようと勇気を振り絞り、再度疑問を投げ掛けた。

「うーん？ お姉さんはねえ、君を拐いに来たんだよ」

「おいおい、随分と物騒な言葉じゃねえか」

ルクルツトが苦笑いをしつつ口にした。誘拐となると理由はインフィーレアが持つタレントだろう。全てのアイテムを装備可能にする能力は誰から見ても破格で、城塞都市エ・ランテルに住む者達で知らぬ方が少ない程の有名人でもあった。

獲物を仕留める猫の様にゆっくりとした動きで近寄る彼女。ランタンが薄つすらと彼女の姿を灯し、露わになった肌を晒していた。

胸部分と下半身の最低限しか護られていない装備。しかし身体を見渡しても傷一つ無い肉体は、その腕に覚えがあるのか腕の良い神官と知り合いなのか……この場においては前者であろう。

彼女の装備一つ一つに見覚えがあった。いや、自分達——ひいては冒険者であるなら誰しもが身に着けている、自身の強さを証明する勲章だ。それを大量に……いや、プレートのみで形作られた防具と言ったほうが早いのもかもしれない。

「そ……そのプレートは……まさか貴女が!？」

驚愕し、震えながら言葉を発する彼は、チームの要として後衛を任されるニニヤ・ザ・マジックキャスターだ。若くして第二位階を修める天才魔法使いとして冒険者の中で

は有名人とされている。

「お姉さんはねえ人を殺すのが大好きで愛しているの！ あ、拷問も好きだよ、ウエヒヒ」

ステイレットを持ち替えた彼女は体制を低くすると、一直線に走り出した。

「《流水加速》 死ねええ！ あっはっはっはあ！」

額へ向け一直線に刺さったステイレットはそのまま脳天を貫通し、何が起こったのか気づく間も無く崩れ落ちてゆく。

「ペテル!!」

仲間の一人が、既に還らぬものと成った彼に向かって叫んだ。目的の少年を庇っていた……それだけの理由で、爽やかで、誰とでも打ち解けられ、仲間からの信頼の厚い、頼れるリーダーが殺されてしまった。

許せない。許して良い筈がない。気がつくど殺気を顕にしていたチームの一人が飛び掛かっていた。

「よ……よくもペテルを！ 貴様ア！ 許さないのである!!」

持ち前の体格を活かし、両手でメイスを力強く翳した。恐らく彼の人生において、最も速い攻撃だっただろう。ゴブリンやオーガとの戦い以上の……全身全霊を込めた鈍器で彼女を撲殺した——つもりだった。

「遅せえんだよお！ そんなとろとろした攻撃が当たると思ってたのか!!」

武技を発動させるまでもなく、ひらりと躲した彼女は片足を地面に着けると同時に折り曲げ、残りの足で力強く踏み出した。

「あつはははは！ てめえなんてスツと避けてドスツだよ！ 死ねえええ!!」

ステイレットはダインの頭蓋を貫通し、己の至らなさに顔を歪めながら絶命した。

「ダイン!!」

仰向けに倒れるダインの顔を踏み付ける少女。鼻は曲がり、数本の前歯が周囲に散らばった。

「ニニヤ！ あいつはヤバい!! 俺一人でも時間を稼いでやる!! その隙にインファイレアを連れて逃げろ!!」

「で、でも……」

ルクルットが声を上げた。それは仲間の一人であり、自分達とは……自分とは違い明確な目的を抱えた仲間に対する想いだ。

だからと言ってニニヤも仲間を置いて逃げ出すわけにはいかない。ここで去れば確実に殺されるだろう。

「お姉さんを助けたいんだろ！ こんな所でくたばって良いのか!!」

「ありがとうルクルット………ごめん」



発破を掛けるルクルットに押され、掠れた声でニヤが答えた。顔はぐしゃぐしゃになり、涙で霞む視線の中、ンフィーレアの手を引つ張り逃げ出す決意をした。

「うんうん、感動のお別れつてやつだね。お姉さん泣けてきちゃう」

白々しく目尻に指を当て、出ても居ない涙を拭う仕草をした。

「遊びすぎだ」

逃げる筈の出口を遮るように、その扉から遭わられた男性。片手には杖を持ち、魔法使いである<sup>マジックキャスター</sup>と伺い知ることができる。しかし自分達を蹂躪する戦士の相方。ともすれば勝ち目が薄いことは明白であり、生き残った3人の顔には絶望が色濃く現れていた。

「ううーん、でもカジっちゃん防音対策はバッチリでしょー。一人くらい遊んでも良いよねえ」

「全く……英雄級の人格破綻者とは困りものだな」

そう言いつつも嫌な顔をしない彼……カジっちゃんと呼ばれる男性は、彼女の性癖を知っているのか呆れながらも咎めようとはしなかった。

「じゃーああ、邪魔な彼には先に死んでもらおうか！」

「え——」

彼女の声を理解するよりも早く、視界の先に彼女の片腕が映っていた。おちやらけた

性格ながらも、人一倍仲間のことを気遣い明るく振る舞う仲間——ペテルは息を引き取った。

「ペテルうううううううううううううううううううううううう!!」

最後の……仲間を失った哀しみがここへ来て溢れ出してしまった。逃げたとしても、ペテルの死を見たわけではない。組合に知らせ、応援を呼べば助けられるかも知れない。そんな虚無にも等しい望みがニニヤの逃走を手伝っていた。

誰もいない。また……目の前から大切な人が消えてしまった。

「ニニヤさん! 気を確かに!! 僕達の魔法で切り抜けるんです!! ここで死んでしまったら……命を張って助けてくれた仲間たちはどうなるんですか!!!」

「う……うん、そうだね。やろう! ソフィーレアさん!」

堅い決意を胸に誓ったニニヤは立ち上がった。自分はまだ死ぬわけには行かない。連れ去られた姉を助けるんだ。

「お涙頂戴ってやつだね、お姉さんまた感動しちゃったよ」

白々しく口にした彼女は別のステイレットに持ち替え、ソフィーレアに向かって走り出した。

「ソフィーレアさん!!」

「分かっています!! &#x300A;魔法盾&#x300B;」

少々距離が開いていたのと、ニニヤをすり抜ける手間から不覚にも詠唱を許してしまつた。だが彼女の口元は吊り上がったまま変わることはない。

「ご丁寧には壁なんて創っちゃつて……じゃあ魔法ごと包み込むつてのはどうかなあ？」

予めステイレットに $\&\#x300A$ ；魔法蓄積 $\&\#x300B$ ；使用し待機状態にし、て、いい、た、 $\&\#x300A$ ；人間種魅了 $\&\#x300B$ ； $\&\#x300A$ ；開放 $\&\#x300B$ ；した。

ンファイレーアの瞳から光が失われ、溢れんばかりに放たれていた殺気は完全に消失していた。とろんとした表情でクレマンティヌを見つめており、先程までの敵意を微塵も感じさせない。

「んふう、いい子ねえ。カジツちゃんの所で大人しくしてしてくれるかな？」

「わかりましたごしゅじんさま」

その言動に疑問を抱かぬまま、カジツちゃんと呼ばれる男性の元へと向かつて行つた。両手を縛られ、目隠しをされても尚、幸せに満ちた表情を浮かべている。

「さああてえ、お姉さんと楽しいことして遊ぼうねええ！」

ペロリとステイレットを舐めた彼女に向かつて視線を……殺意に満ちた視線を送るニニヤ。仲間たちには隠していたが、今と成つてはその必要が無くなつてしまつた。

「もう……もう貴様を許しません。ぼくを本気にさせたことを地獄の底で後悔させてあ

げますよ」

ローブから取り出した幾本ものナイフ。お手玉のように回転させながら彼女に見せつけている。

「曲芸でえ、このわたしに勝てるでも思ってるのお？」

余裕は崩さないつもりの様だが、その変貌に苛立ちは隠せておらず吊り上がった口は牙を剥き出しにしていた。

「遊んであげようと思っただけどやっぱり無し。そのまま殺してあげる」

姿勢を低く構えた彼女は、何時も通り刺殺を行う準備を始めた。これまでの戦いが……自分では歯が立たない強者との経験が彼女から慢心を消し去り、真剣な顔つきでニニヤを見据えた。

「《能力向上》 《能力超向上》」

武技を発動させる彼女は、頃合いを見計らい突撃した。

「させません!!」

すかさずニニヤがナイフを手に取り、一本、また一本と彼女へ向かって投げ飛ばした。殺意を込めて、その一本で相手を仕留める決意を込めて。

「《不落要塞》 《流水加速》」

全ては避けられないと判断した彼女は、ステイレットでナイフの軌道を逸らした。ど

れ程の力で投げているのだろうか。掠めたナイフの衝撃がステイレットを伝わり、腕が痺れるような感覚を抱いた。

全てのナイフを捌き切った彼女は内心、笑みを浮かべながらも必至に堪えていた。少しでも隙を見せれば負ける。最後まで油断を捨てる覚悟で彼女は突進した。

「この人外！ 英雄の領域に立つたクレマンティーヌ様がああ！ 負けるはずがねえんだよおおおおおおおおお!!」

最早、視覚に捉えることすら叶わぬ攻撃を手に彼女……クレマンティーヌは二ニヤへ向かって豪速の武器を繰り出そうとした。

——瞬間、クレマンティーヌの視界が暗転し、その場に崩れ落ちた。

「き、貴様！ 一体何をした!!」

カジツちゃんと呼ばれる……呼ばれていた男性は叫んだ。それもそのはず、クレマンティーヌはこの世界において文字通り最強に近い存在だ。彼女に肩を並べる者は片手で数えられるくらいだろう。

二ニヤは不敵な笑みを浮かべると、何事もなかったように答えた。

「手刀って……知っていますか？ こう見えてよく、ガラス瓶ですら真つ二つにしちゃうんです」

恐ろしく速い手刀でクレマンティーヌの首元を攻撃し、その意識を消失させたのだ。

その速度故に、彼は見逃していたのだ。

「う……うううん」

「ンファイレーアさん！」

クレマンティーヌの意識が失われたことにより、洗脳されていたンファイレーアが意思を取り戻していた。

「な！…この……しまった!!」

魔法を唱える前に力負けしてしまったカジっちゃん。視界は暗いものの、ニニヤの声  
が聞こえる方向へ走り出した。

「今外しますね！」

隠し持っていたナイフで手枷を切断し、視野を取り戻したンファイレーアであった。

「まだ……やりますか？」

ナイフを片手に殺意を振りまくニニヤ。クレマンティーヌが敗れたとなれば、カジっ  
ちゃんですら分が悪い。

「覚えてろよ!!」

言葉を吐き捨て、逃げるように走り去ったカジっちゃんであった。

「大丈夫ですか！ンファイレーアさん！」

「ぼくは大丈夫です。ニニヤさんこそ大丈夫ですか？」

傷のことを聞いているのではない。喪ってしまった仲間たちのことを思い、心配をしているのだ。

「心配には及びませんよ。ぼくが正体を明かしたのですから」

思いの外ケロツとした様子のニニヤは軽く答えた。

「え？」

理解に苦しむインファイレア。彼はその数秒後に全てを知ることとなる。

「痛くて……」

「危うく死ぬかと思っただぜ……」

「全くである」

「みなさん！ 生きていたんですか!?!」

先ほど脳天を貫かれたはずの彼らが起き上がっているではないか。よく見ると、血は垂れているものの、傷跡が塞がっていた。

「なんでもナーミンってね」

この日一番の笑顔でニニヤは口にした。

「大丈夫ですかみなさん!!」

勢い良く扉が開かれ、大柄な全身鎧の男性と見目麗しき女性が現れた。

「くすつ……あははははははは!」

彼ら二人を除く人達が笑う中、漆黒の戦士は疑問に首を傾げていた。